

JICA インクルーシブ教育研修のワークショップ

「障害者がみんなといっしょに学び合うことについて」

2015 年 9 月 17 日 守口市生涯学習センター・ムーヴ 21 にて

JICA では、毎年「インクルーシブ教育/特別支援教育の推進」をテーマにした研修をやっているのですが、昨年から大阪の「共に学び共に生きる教育」を研修プログラムに入れたいとお話をいただきました。今年は9か国から16人の研修員が来日されました。アフガニスタン、スワジランド、タジキスタン、トンガ、ツバル、ベトナム、ミャンマー、モザンビーク、モンゴルです。恥ずかしながら、初めて聞く国名もあり、はてその場所となると半分以上は世界地図で指差すこともできません。



1 か月余りの滞在中、ほとんどは国立特別支援教育総合研究所や横浜国立大学、付属特別支援学校など、神奈川・横浜で研修が行われます。その中で 4 日間だけですが、大阪での研修が組み込まれました。そのうちの半日のプログラムをコーディネートさせていただき、『障害者がみんなといっしょに学び合うことについて』のテーマで

ワークショップに取り組みました。

大まかに流れをいうと、

- ①人工呼吸器ユーザーのユウタロウさんが出演しているドキュメント映画『風は生きよという』から 10 分間の映像をみる。
- ②映画を観終わったところに、ユウタロウさん本人と両親が登場。
- ③お母さんからユウタロウさんの生い立ち（12 歳まで）を話す。



- ④ここで「ユウタロウさんはみんなといっしょに教室で授業を受けているが、学習していると思うか？」をテーマにディベート。A:「している」 B:「学習し

ていない」の立場に分かれて、ロールプレイ。

- ⑤お母さんから、支援学校初等部を卒業後、地域の公立中学校に入学したこと、その中学生活について話す。

⑥2 回目のディベート「ユウタロウさんが教室にいることは、周りの生徒にとってプラスになるか、どうか？」をテーマに、A:「プラスにならない」 B:「プラスになる」の立場でロールプレイ。

⑦お母さんから、高校受験と、現在の高校生活の現状について話す。

⑧司会から「お母さんの話を聞いてみると、専門家がいないでも、専門的知識がなくて、施設設備が不十分であっても、生徒たちとの関わりが生まれ、学び合いが生まれているように聞こえるが、どう思うか？」と、課題を投げかける。ロールプレイではなく、自分の意見で話し合う。

⑨ユウタロウさんと研修員が直接に話し合ってみる。ユウタロウさんの意志表示の手段は（今のところ）まばたきだけ。スクリーンにアップしたユウタロウさんの顔を映しながら、対話が続く。



私は進行役をしたのですが、貴重な体験をすることができました。最初ディベートのやり方に戸惑いを見せていたものの、一人、二人と発言が生まれると、次々に手が上がり発言が続きます。中には役になり切って立ち上がり、大演説をぶちあげて拍手喝さいを浴びるパフォーマンスまで飛び出しました。進行するにつれて、真剣に考える空気が伝わってきます。自分を開いて相手に訴えようとする積極さや、討論を楽しむかのような解放感は、日本人の中でやるディベートでは感じられないものがありました。



（⑧で）自分の意見を求めたときに、「私は今朝まで、重度の障害者はやっぱり学習はできないと考えていましたが、ユウタロウさんをみて、今日の話聞いていて、私の考えは変わりました」「私は特別支援教育のコーディネーターをしています

が、自分の国では施設も設備も十分なものはありません。障害者についての詳しい知識もありません。日本のようにできないと思っていましたが、今日の話し合いに参加して、施設や設備や専門家がなくてもできるし、やらなければいけないのだと思いました。国へ帰ったら、ユウタロウさんのことを思い出してやっていこうと思います」…というように、自分の国の現実を通して考えようとする意見が続きました。学校や子どもたちの顔が思い浮かぶのか、時に厳しさやあるいは柔和さが発言する声に響いているように聞こえました。来日以来、国立の研究所や大学、施設の整った支援学校や支援学級を視察し、日本の立派な環境を目の当たりにして、専門的知識に裏打ちされた学者や教師の話聞いて、自分の国の現実との距離を否応なく感じさせられていたのではないか、それがようやく本音を出せたのではないかと私には思えたもの

でした。

ツバルの女性は「私はユウタロウさんをみたときに、胸のこみ上げるものがあった、その気持ちをうまく話すことができません。ただマリさん（お母さん）の愛情がユウタロウさんを育て、学習を支えているのだと思います。」と言って立ち上がり、マリさんのそばへ近づいたと思うと美しい花で編んだレイを自分の頭から外して、マリさんにかぶせ、しっかりと抱擁しました。拍手の中、マリさんはお礼と共に、「不思議に思われるかもしれませんが、私はユウタロウさんが生まれた瞬間から、一度も悲しく思ったことはありませんでした。いつもそのままのユウタロウさんが可愛くて、愛しています。」と話しました。



ワークショップが終わってからも、賑やかに全員で記念撮影をし、あちらこちらで話の輪が生まれます。次々にユウタロウさんに話しかけ、ツーショットの写真を撮る列が止みませんでした。研修生もその場に参加した日本人の参観者たちも、みんなが深く考え学び合った2時間半であったと、そのすがすがしい表情を見ていて思いました。

ワークショップを参観していた人たちからいただいた報告文、感想

◆関山域子さんから

今日は、守口市生涯学習センターで、日本に研修に来ておられる16人のJICAの人達と北河内の私達とのジョイントの会でした。と言っても、彼らはもう3週間日本に滞在していて、殆どが神奈川県で日本の「インクルーシブ教育」「特別支援教育」の講義やら実際を見て学んで、その後関西に来られたという流れです。



タイトルは、日本の「インクルーシブ協育/特別支援教育の推進」なのですが、その関西版を学びにお越しになったのだと思います。大阪では、関西流を知って頂こうと、そして、皆さんの思いをお聴きしたい、と。

お越しになった方々は、アフガニスタン、スワジランド、タジキスタン、トンガ、ツバル、ベトナム、ミャンマー、モザンビーク、モンゴルの9か国から16名。何れも各国の教育界の代

表的な学者、大学人や高・中・小・幼児教育の責任ある立場の実践家、理論家の方ばかりです。

余りにも、豊かで楽しくて、ハプニングいっぱいの時間が過ごせましたので、本当なら順序追って、丁寧な報告をすべきでしょうが、今日は、皆様に雰囲気のお裾分けという感じで報告します。詳しくは、暫くしたら、「知的障害児」を普通高校へ北河内連絡会のホームページで、松森さんがきっと紹介してくださる予定ですので、そちらの方をご覧いただきたいと思います。

”ワークショップ 「障害者」がみんなといっしょに学び合うことについて” と、北河内では銘打って、ただの報告にとどまらず、できるだけ来られた方々が、楽しく、思いを出す場を創りだしたい。その中心的な存在は、新居優太郎さんとお母さんの真理さんと決め、松森俊尚さんが、企画の中心・そして当日のコーディネーターになって、進めていきました。

◎ 始めに映画『風は生きよという』から、優太郎さんの映像が、支援学校初等部から地元の中学校での授業風景、まばたきで両親の会話に応じる優太郎さんなどを観ました。

◎ その映像が終わってから、やおら、優太郎さん、お母さん、大作さんがドアから登場。

16人の皆さんは、ストレッチャーに乗って登場した優太郎さんに息をのんで・・・の瞬間だったと思います。(後で「優太郎さんを見られなかった」という感想を出された女性も)

◎ 新居真理さんが優太郎さんの0歳から12歳までの紹介を映像を背景にしてくださいました。(研修員の手元には、英訳した紹介文がありますが、同時に、真理さんのあとで、英訳してくださいました)



◎ さて、ここが山場の①です。松森さんは、「デイベート」と当初は名づけておられましたが、伝わりにくいという事で、「ゲーム」と。チームをAとBに分け、自分の意思とは違ってもその役を演じてもらうことにしたのです。

問題の①は、＜優太郎さんはみんなといっしょに教室で授業を受けて学習していると思う(A)か、学習していないと思う(B)か？＞

始めのホンのわずかな時間は目を白黒させておられました。がそのうち、すぐに手が上がりました。

(A)の立場の人が、(関山の)予想以上に意見を言われます。(B)の立場の人は、苦勞して答えておられます。自分の本当の気持ちと違う～という事をちょっぴり表したりして・・・。(私の予想と反対でした。)

どんどん、色々な方の手が上り、また、話す口調も自信たっぷり、ハイになって、演じて

くださる方が出てきました。会場がわくわく、笑い声もいっぱい。ジェスチャーもたっぷり。すごく、この方たちは、思いの輪郭をはっきり表現されるなあ〜と、感心してお聞きしていました。

◎ 15分間位のゲームの後、真理さんが、中学校生活を話されました。中学校で、「ここへ来る子ではない」と言われたり、色んな立場の大人から、冷たくされたり、夜家で「ただ、学校に來ただけなのに・・・。」と涙にくれた話←私も初めてお聞きしました。学校では、親が付添う事をずっと求められた話、修学旅行などすべての校外学習に、生徒達と一緒にのバスに乗せてくれなくて、別の介護タクシーで行かせられた話。それでも、授業に参加できるようになったり、親の付添が3年生になって、なくなってきた話など。映像を見つつ、話されました。

◎ ゲームの問題②です。＜優太郎さんが教室にいっしょにいることは、周りの生徒にとって、
(A) プラスにならない と思う、(B) プラスになる と思う＞

で。こんどは、先の立場とちがって、Aの人達が言いにくそうで、Bの人達が伸び伸びと論をはっておられたように思いました。ところが最後の方は、Aの立場で、プラスにならないことを、周りの生徒にとっては迷惑、別のところでやるべきなどと、さっきのご自分の発言とは真反対で主張されて、その意気込みとジェスチャーも含め、名演技で、皆さんも大いに喜び、私などは、爆笑していました。

(書き遅れましたが、英語で話された研修員の話は、日本語訳をして頂いているので、英語が苦手な私などにも伝わっています)

@@@ さて、続きです。@@@

会場の前のスクリーンに、ビデオカメラをもったお父さんが映し出した優太郎さんの顔の表情を、皆さんが見つめながら、討論に参加しておられます。

◎ 優太郎さんの高校受験と現在の高校生活を、真理さんが語られました。

高校（定時制）では、家族が驚くほど「うまく」行っている。教師たちの積極的な姿勢。工夫。科学クラブに先生から誘われて、今その活動が楽しくて・・・。先生達に刺激されて、生徒達も関わって。合宿で風呂も生徒が入れてくれて。優太郎さんは、充実感を持って一日も休まずに元気に夜間高校に通学している、と。

そして、真理さんは、言いました。中学校とちがい、支援学級もない。支援教室もない。支援担任も居ない。（看護師は居る）

普通に、みんなと一緒に暮しているー吸引も胃ろうの食事、授業も、クラブも、合宿も。専門家もいない、格別設備もない。

でも、こころがある。やっていこうよ！〜という。

◎ そこで松森さんから研修員の皆さんに、今度はフリーに、自分の意見を話してもらう様に設定された。中身は、真理さんの最後の言葉をどう思うか？つまり、

＜真理さんが専門家がいなくても、設備が充分でなくても、生徒達との関わりが生まれたり、学びが生まれるのでは？やっていこう！という心が大事と言われたが、どう思いますか？＞

と、皆さんに問いかけられました。。

勢いよく、今まで発言されなかった方々からも手が上った。

◇ 「技術や力でなく、あなたは見る事が出来る」

◆ 「”障害児”はいない。機会を持っている子どもと知っている」

◇ 「専門家でない。インクルーシブ教育とは、ここから子どもと付き合う事を願うところから始まる」

◆ 「昨日まで、彼のような人は、学べないと思っていた。優太郎さんの事例は、すごく重要。感銘を受けました。私達が可能性を信じたら、何でもできる、思った」

◇ 「自分の国では、お金もないし、専門家も居ない。でも、きょう優太郎さんに会い、話を聞いて自分の国でもやれると思った」

◆ 「もし、私が親だったら 我慢できないと思った。私は、優太郎さんが入場したときに、見つめられなかった。お母さんばかり見ていた。・・・私はクリスチャン。両親の愛を通して、優太郎さんが学習していけるのではないのでしょうか」

この発言を受けて、真理さんが

「優太郎が生まれて、はじめから、このままの状態に自然に受け入れたし、可愛いなあ～と思って接して来ている」と。

このやりとりは、とても迫力がありました。すごい!!! わかりあえた!!! 心が響きあったと思えた瞬間だったと思います。思わず、研修員さん達も、私達も、拍手しました。――優太郎さん、真理さん、大作お父さんに。そして、ご意見を率直に語ってくださった全ての方々に。

◎ 研修員の方々から、優太郎さんに質問の時間です。

◇ 「優太郎さんは、どんな教科が好きですか」

⇒真理さんが優太郎さんと会話して答えました。「数学、理科、社会です」 ほう～の声。

質問した方。「僕は学校で数学を教えています」と、喜んで。

◆ 「優太郎さんは、どんな時が幸福と思いますか？」←質問が長くて、難しくて、優太郎さんは、困っていました。眠気が来た位だったようです。

まあ、こんな調子で食い入るように優太郎さんの表情を見て彼のまばたき（＝イエス）を見つけようと熱心に質問しておられました。みんなで、集中し、盛り上がりました。

◎ 最後に松森さんからまとめの言葉。

皆さんの国より日本の方が、「障害児」教育について予算があるかもしれません。

しかし、日本は、社会から、分けられ、「障害児」が別の場所で、勉強しなくてははいけない。ところで、「障害者権利条約」でインクルーシブ教育に取り組まなくてはならないとなっている。

どこでもやらなくてはならないし、できるのではないかと思う。つまり、できるかでき

ないかでなくやりたいか、やりたくないかである、と。今日の学習会で私（松森）は学びました。

- ◎ みんなで写真撮影 ： 賑やかな事。どんな集合写真ができるかな。新万智子さんは腕を組んでいるかな？優太郎さんの表情は？

❖ 研修員さんの皆さん、お世話になった二羽泰子さんやスタッフの方々。
本当に、ありがとうございました。

北河内や大阪市、高槻から御参加頂いた傍聴の方々、いかがでしたでしょうか？
ありがとうございました。

その後は、新さんと万智子さんが皆さんに挨拶されたり、鶴島さんが英訳した本「トミーの夕陽」を代表の方に渡されたり、優太郎さんと真理さん、大作さんを囲んで、研修員さん達との和やかなおしゃべりが弾みました。時間がオーバーして、昼食はそこで食べられなくなり、次の場所への移動のバスの中で食べて頂くことになりました。

また、来年、このような企画があるといいですね。でも、それは、分かりません。「鬼が笑う」話です。

❖❖❖ 真理さんが、女性から、ヘアの❖バンドをプレゼントされて、今日は、真理さんが、花嫁の如く美しく輝いておられましたよ。



☆☆☆ 真理さんに、昨日の優太郎さんについて、どんな感じに見えたか、お聞きしました。

「すごく生き生きしていて、刺激をいっぱい受けて、楽しそうだった。」と。

私（関山）もそう思いました。顔がつやつやとして張りがあった、目がしっかりとパッチリ輝いていました。きっと、耳も、ダンボになって聞いてくれていたと、思います。

私は、「僕が主人公なんだ！」と自覚してくれていると、思えた気がしていますが、どうかな？
打ち上げでお茶を飲んだ所で、私が「今日は楽しかったかな？」と優太郎さんに聞くと、体をはねるようにして「ぱちり」でした。

以上、概略のみの報告で、失礼します。 関山域子

◆ 井村よしみさんのフェイスブックから

「専門家ではない。インクルーシブ教育とは、こころから子どもと付き合う事を願うところから始まる」「今朝まで、重度の障害者は学習はできないと考えていた。でも、ユウタロウさんを見て、今日の話を聞いて、私の考えは変わりました。」「自分の国には、お金もないし、専門家も居ない。でも、自分の国でもやれると思った。」

そんな研修員の皆さんの言葉にとっても感動し、そして、どれも「そうそう！」「うんうん。」と聞いていました。

また、真理さんが「生まれた時から、ずっとかわいいな、かわいいなと思って育ててきた。」とおっしゃる言葉に、あらためてハッとする思いでした。

ユウタロウさんやご家族の方、昨年、大阪市内での入学拒否と取れる学校の対応、私自身も、娘に対して『こんな子は～。』と驚かれたり、拒否られたりしてきた事は幾度もあるけれど、それが教育の場でも多くあり、その何が教育？と思ってきたこと。

周りから「こんな子が…」「そんな子は…」と、とても安易に言われてしまうけれど、一緒に過ごしている者にとっては、フツーの子であり、女の子と男の子とが違うとか、活発な子とおとなしい子とが違うとか、その程度の違いにしか思えないのに、そんな違いを理由に拒否られてしまうことが度々あるという現実。

でも、やがて一緒に過ごしていると、「こんな子が…」「そんな子は…」と思う人はいなくなるし、親の思いと同じように「かわいい。」と思ってくださるようにもなっていきます。その日、その瞬間に考えが変わった、とおっしゃった方のように、人の心が変わっていき、わかりあえる関係になっていく。時間がかかる場合もありますけどね。でも、そんな場面に、そんな周りの人との関係に、次に嬉し涙をいっぱい流します。

いつか、そんな風にイチイチ感動することなく、それが当たり前になるといいな、と思うものの、人と人とは本気でぶつかり合ったり、わかりあえたりを経験を沢山味わわせてもらえること、私は本当に幸せだなあ～と思いながら生きてる。そんなことを、グルグル頭の中にめぐらせていました。

先日の研修会では、たった数時間一緒に過ごただけで理解が広がっていき、それが、私にとっては全く言葉もわからない相手の方たちと心が通じ合ったかのようで、私は単に傍聴してただけなのに、その場にいた人皆が、同じ思いを共有できたことが、何より感動し、ステキな時間となりました。

専門性とか、設備が、とか、本当に関係ない。それは、後から付いてくる。まずは、「こんな子が…」という意識を変えて、「へ～。この子は、そういう子なんや～。」と、障害についてでもなく、その子自身を見てくださるようになれば、結果的に、どの子に対しても、その子自身を見ようとし、「この子にとって、どうしてあげたらいいだろう？」と考えるようになっていくんだと思います。

みんなの学校の大空小学校は、決して校長のリーダーシップのせいじゃありません。たまたま大空小の木村前校長にリーダーシップがあったことで、それがきっかけで、あの学校は生まれたかもしれない。でも、フツーの教師であっても「こんな子が…」「そんな子は…」と思わずに、「どの子も一緒に学んでいこう～！」と思ってくたださるだけで、インクルーシブ教育は実現すると思います。

そこから、子ども達と一緒に、いろんな工夫と発見をしていくことができるはずです。昔からある大阪の「ともに学び、ともに生きる」教育は、そんな感じでしたし、娘もそんな風に周りの子ども達と一緒に過ごしてきたのですから。

そんなことも、また再確認できた研修会だったのです。

◆二羽泰子さんから

今回のプログラムは、15日に私から大坂プログラムの導入を行い、16日に豊中の考える会の方を中心として共に学ぶことや親と学校の関係についてお話いただき、17日に北河内の方を中心とした高校問題を考える会の皆さんにご協力いただいて、ゆうたろうさんとお母さんのお話を中心として、共に学ぶことにどんな意味があるのかについてみんなで考えました。

そしてその日の午後にお邪魔した松原高校において、生活的にもしんどい生徒層が中心の学校の中で、障害のある無しや出身国や家庭背景に関わらず、多様な生徒たちが差別の無い学校や社会を作っていくために、長い間取り組んできたことを学び、生徒たちが楽しそうに受けている授業を見せていただきました。

以下が詳細と研修員の様子になります。私は特に17日は通訳で必死だったのでほとんどノートを取れていないので、ここで書いている講師の方等の発言のニュアンスが少し違うかもしれないのですがご了承ください。

15日：「横浜の研修から分かったのは、日本にあるのは特別支援教育であって、インクルーシブではないということです」というのは、日本の教育について聞いたときに研修員が最初に言ってくれたことです。

私からは、大阪府で70年代から広く行われてきた反差別的な動きに伴って、先生たちが親たちと協力して、重度の障害児を含めてすべての子どもを排除しない学校を共に作ってきたことを説明したうえで、それぞれ研修員の出身国でインクルーシブ教育を実現する際に何が障壁となっているのかについて考えてもらいました。彼らから出てきた主な障壁は、「インクルーシブ教育の政策があっても現場に適用できていないこと」、「資金面の問題があっても設備が整わないこと」、「教員研修が不十分であること」の主に三つです。

次に、そのような障壁をどう乗り越えていけるかについての戦略を話し合いました。ところが、どの障壁についても、結局「私の国は資金が無いからできない」という結論に達してしまうのです。「日本のようにすばらしい設備や人材育成をするお金が無いから援助してほしい」と口をそろえて話す研修員に対して、日本でも予算が無いので設備が整わないから、専門家がないからという理由でほとんどの地域の学校では障害児の就学が断られてきたこと、もし十分な予算が確保できるまでインクルーシブ教育はできないとするなら、いつになってもどこの国でもインクルーシブ教育はできないのではないかとということで問題提起を行いました。大阪府で共に学ぶ取り組みを進めてきたほとんどの地域では、エレベーターも無く、先生たちの数も足りず、前例も無い中で、それでも断ることは差別につながるからと、先生たちがクラスの子どもたちと相談しながら、様々な問題と取り組んできたことを最後に説明し、設備や専門家がない中でどのようにインクルーシブ教育を可能にしてきたのか、障害の重さが重度であっても通常学級で受け入れることがなぜ可能だったのかということを経験して大阪で学んでほしいことを伝えました。

16日：「身体障害者のインクルーシブ教育はできそうだと思うし私の国でも前例があります。でも知的障害児は通常学級の数学など一緒にいても学べないでしょう。それはどう考えますか？」というのがこの日、研修員から出てきた大きな問題提起でした。

山口さんや鈴木さんが出してくれた答えはこうでした。

「もし教育が、国などのカリキュラムに定められた学力の基準を達成することを目的とするな

ら、確かに知的障害児は授業では学んでいないといえるの かもしれません。ですが、私たちは教育の目的は、子どもたちが明日もまた学校に来たいと思えるようになり、今後も幸せに生きていくために行うのだと思っているのです。そう考えれば、障害の有無ではなく、多様な子どもが同じクラスと一緒に勉強することは、どの子にとっても大切なことなのです」

何より、親として息子さんたちの学校生活の様子を紹介してくださった鈴木さんの幸せそうな笑顔を見て、研修員も、そんなのかもしれないと共感を覚えたようでした。

さらにこの日の学びは、教員が教育改革をする可能性、親の会が学校と協力することで達成できることの大きさ、共に学ぶ取り組みを続けていくことで他の親からの反対なども無くなってきたことなど、先生や親の会が共に学ぶ取り組みをどのように支えてきたのかというところに集中しました。十分な設備が無い中で、同じクラスの子どもたちと一緒に問題と向き合うことで解決してこられたのだという話もしていただきました。

後で行った大阪プログラムの振り返りの中で、教員経験のある研修員は、「政府が何もしてくれなくても、あきらめずに教員がインクルーシブ教育のために立ち上がることで変えられることが学べて本当に良かった。私は国に帰ったら、先生たちに働きかけて、自分たちの手でできるだけ多くの子どもたちが学校に来られるようにするために、政府や地域に働きかけていきたい、信じれば先生たちが社会を変えていけるはずだから」と力強く述べていました。

また親の会に所属する研修員は、「うちの国にも親の会はたくさんあります。でも大阪府が違うのは親の会と先生たちが協力してきたところです。国に帰ったらぜひこの取り組みを伝えたい」と話していました。

17日：関山さんが非常に詳細にレポートしてくださっているので詳細は省きますが、この日の主役は何より、優太郎さんとお母さんでした。

毎年そうですが、ほとんどの研修員はインクルーシブ教育を実現させられるならしたいという思いを持っています。なので意見を聞けば、当然共に学ぶことは重要だと言います。ですが、それはしばしば現実の問題として身近に感じていないからこそ言えることだということのも事実です。16日に豊中の学校のビデオを見て、内心、あんなに重度の人がうちの学校に来たら困るなあと思っていた研修員は多いと思います。ですが、「あくまで特別な例でしょ」、とたかをくくっていたものと思います。

ところが、優太郎さんが授業を受ける姿を映したビデオを見た後、実際に優太郎さんを目の前にし、お母さんから「特別な設備や専門の先生のいない 高校が一番良かった」という話があったことで、研修員は例外なく衝撃を受けていました。本人を目の前にして、就学を断る学校側の立場でひどい言葉を投げつける役を演じた研修員にしても、どうしても涙が出てしまって優太郎さんをまっすぐ見つめられないと涙ながらに明かす研修員にしても、自分たちの立場からは向き合ってこなかった現実と初めて向き合って多くの押さえ切れない思いでいっぱいになっていた様子でした。その日の松原高校も含めて、これまで英語が苦手だったり、自信が無くて発言していなかった研修員が、必死で自分の気持ちを発言し伝えようとする姿が見られるようになりました。

松森さんが、「障害のある子を受け入れられるかどうかの問題ではなく、受け入れたいかどうかの問題なのです。十分な資金や設備や専門家が確保できるかどうかではなく、インクルーシブ教育を推進して、どんな子どもも学校に行けるようにしたいのかなのです。やりたいと思えば必ず達成できます」と呼びかけてくださったことと、優太郎さんの姿が重なって、重度の場合は学べないと考えていたり、うちの国は日本とは違うからインクルーシブなど無理だ

と考えていた研修員が、「自分の考えは間違っていた」、「今日の話聞いて考えが180度変わりました」と興奮しながら語っていました。

その後に松原高校にお邪魔して、差別と向き合ってきた歴史からどの子どもも大切にしたい仲間作りの重要性などのお話を伺い、授業の様子を見せていただいて、それまでの大阪での話しがつながったようでした。たくさん質問が出て、今まで聞いた学校現場の話を一つ一つ確認し、納得する研修員の姿が見られました。

横浜からずっと研修に同行している日本人の方が、「大阪プログラムは全部繋がっていてすごいですね。普段から協力しているからですね。」と言って感心していました。

15日に講師の方に研修員の様子をお伝えしていましたが、ぎりぎりだったにも関わらず、それを読んで準備していただいていた内容に柔軟に追加して対応してくださっていたことで、この三日間のプログラムは本当に一貫したいいものになったと思います。どの講師の方が抜けても作り上げられなかったものではないかと思います。ありがとうございました。